

窓の灯、雪を溶かさず

——正岡子規『新俳句』と「月並句」の差異について——

青 木 亮 人

はじめに

明治俳句を一変させたのは正岡子規達である、とは定説である。

それは「俳句革新」と称され、次のように説明された。

近世末以降の旧派の弊風を打破し、明治新時代の写実説を深めて、俳句革新・短歌革新・写生文の提唱に写生の平淡味を實踐し、近代短詩型文学革新の偉業を達成した。（『俳文学大辞典』（角川書店、平成7・10・27）、「正岡子規」項。和田茂樹執筆）

「近世末以降の旧派の弊風を打破し」、新時代の俳句観を提示したのが「俳句革新」であったという。そして、子規達が「旧派」（宗匠株を有し、江戸後期以来の俳句観を遵守する俳人達の総称^①）をいかに「打破」したかは、次のような俳論を例に説明されることが多

い。

俳句につきて陳腐と新奇とを知るは尤も必要なり。（子規

「俳諧大要」、『日本新聞』明治28・12・23）

俳句には「陳腐／新奇」の二種があり、句作の際にはその差異を知ることが重要といふのである。このような子規論を参照しつつ、「陳腐」は「旧派」の句群、また「新奇」は子規達の句群と見なし、「俳句革新」とは「陳腐」な作品を詠み続ける「旧派」を打破し、近代俳句にふさわしい「新奇」な作品を求めた運動と定義されてきた^②。

この図式、すなわち「陳腐＝旧派の弊風／新奇＝子規達の俳句革新」とまとめた先学を参考にしつつ、考察を一步進めてみよう。子規が「陳腐／新奇」と判断した作品は、具体的にどのようなものなのか。

たとえば、子規派初の大規模な選集『新俳句』（民友社、明治31・3）ほどの点が「新奇」なのであろう。子規選に近く、また「新」と銘打ったこの選集は「旧派」と異質の「新奇」な句群を収録したはずであり、加えて子規自身が序文で次のように述べた選集であった。

明治の俳句といふ、或は明治年間の俳句を尽く含むとなす者もあらん。されど余のいわゆる明治の俳句はかの俗宗匠輩、月並者流の製作含まず。蓋し彼等の製作の拙なるを以ての故に此を斥くるのみにあらず、彼等は不当の点を附して糊口の助となすの目的を以て之を作り、景物懸賞品を得るための器用として之を用うる者、其目的已に文学以外に在り。文学以外に在る者、固より俳句と称すべくもあらざればなり。（略）明治の俳句が如何にその特色を現し来るかを知らんと欲せば、試みに『新俳句』を読め。（『子規全集』16巻（講談社、昭和50・8・18）、238〜239頁）

「文学」としての「明治の俳句」は「俗宗匠輩、月並者流の製作」を除く作品——つまり子規達の句群——に求めよ、という。なぜなら、「月並者流」は「製作」が「拙」で、かつ「景物懸賞品を得るための器用として」句をひねるため「文学」に値しないが、一方の子規達は「文学」にふさわしいというのである。

窓の灯、雪を溶かさず

この「文学以外／文学」の区別は、作品上では「陳腐／新奇」の差異に置きかえられるのではないか。そうであれば、子規達の『新俳句』には「月並者流」の句群と対照的な「新奇」な作品が多々収録されたはずである。では、それは具体的にどのような句で、また子規達は何をもって「陳腐／新奇」と判断したのか。

このことを検証するため、「月並者流」の作品と『新俳句』所収句を比較することで「陳腐／新奇」のあり方を考察してみたい。本稿は子規達が論者として主張した「俳句革新」を問うのではなく、彼らが実作者としていかに「俳句革新」を実践したかを検証する試論である。^④

I. 月並句／新俳句の差異

作品における「陳腐／新奇」の区別を、子規自身はどのように把握したのであろうか。「俳句問答」（『日本新聞』明治29・5・2〜同年9・13）を見てみよう。

問 新俳句と月並俳句とは句作に差異あるものと考へらる。果して差異あらば、新俳句は如何なる点を主眼とし、月並句は如何なる点を主眼として句作するものなりや。

答 新俳句とは新派俳句の事を謂ふか。新派にも種々あるべく、我尽く之を知らず。もし我俳句につきて言はんか。（略）第

二、我は意匠の陳腐なるを嫌へども、彼（『月並句、引用者注』）は意匠の陳腐を嫌ふこと我よりも少し、むしろ彼は陳腐を好み、新奇を嫌ふ傾向あり。例へば『黄鳥の初音や老の耳果報 蓬宇』の如き誰が聞きても陳腐なるべきを、この老俳諧師は今更のやうに作れり。この句の如き、必ずしも類句を挙げて而して後始めてその陳腐を知る者にあらざれど、念のために古人の類句を示さんに、

鶯の耳に順に今年かな

紹 巴

鶯や耳これを得て今朝の春

昌 察

鶯や耳の果報を数ふ年

梅 室

六十の春

鶯に耳面白き今年かな

乙 由

の如きあり。殊に梅室の句は最も相類似せるを見る。（『日本新聞』明治29・7・27）

子規達と「月並句」（常識と類型に沿った凡作という意味で、子規達が批判的に使用した）の差異を、問答形式で表明した一節である。論によると、子規達は「意匠の陳腐」を嫌うが「月並句」は「陳腐を好み、新奇を嫌ふ傾向」があり、一例が蓬宇（江戸後期→明治期の宗匠）句であるという。句は、幾霜の時を経て「耳順」（論語）たろうとする「老」の身が、春にまさに「黄鳥の初音」を

聴きえた喜びを「耳果報」と詠んだが、それは紹巴（戦国時代の連歌師）、昌察（江戸期の連歌師）、乙由（元禄→元文期の俳人）、梅室（江戸後期の俳人）等の「古人」が詠んだ趣向に沿った句作であり、そのため「陳腐」なのである。

この論で、子規は蓬宇句のみ扱わず従来の「類句」と比較して「陳腐」と判断した点が注目されよう。すなわち、「月並・陳腐」は比較上の問題で、句の良し悪しは「類句」量で変化するのであり、単純にいえば「類句」の多い場合は「陳腐」、逆に「類句」が少なければ「新俳句」なのである。

この子規の論旨は蓬宇のような作品を「陳腐」と見なす一方、『新俳句』には「類句」の稀な句が収録されたことを示唆してはいないであろうか。その実際を、『新俳句』における「鶉」（夏の季題）句を例に検討してみよう。

II. 罪深き鶉飼／鶉のたけり

- ① 篝火の鶉繩に光る雫かな 月 我
- ② 羽た、きや繩に釣られし鶉のたけり 碧梧桐
- ③ 暁や鶉籠に眠る鶉のつかれ 子 規

（夏雑之部「鶉」項）

「鶉飼」とは、月のささない夜に鶉飼が小舟に乗り、首結いした

鵜を川に放ち、船先に篝火を焚いてその光に集う鮎を捕る漁法を指す(図1)。「鵜飼」は鵜が魚を呑みこむや、否や首結いした縄で舟にたぐりよせ、舟ばたで鵜に吐き出させるのである。

この「鵜飼」を、子規達は次のように捉えた。闇夜の篝火は舟や鵜飼の顔、川面の鵜のみならず鵜縄から滴る雫も照らし(①)、あるいは川面から顔を上げた鵜が鮎を呑みこもうとした瞬間、鵜縄で手繰られ舟ばたに「釣られ」たため「羽たゝき」をして猛る鵜がいれば(②)、深夜から夜明けまで働かされ、「暁」には「つかれ」て「鵜籠に眠る」鵜もいるのであった(③)。

これらの句に対し、俳諧宗匠達の俳誌・俳書の「鵜飼」句は次の通りである。

④幾筋も罪たくりこむ鵜縄かな (無署名)

〔『俳諧十万集』夏部(積善館、明治29・10・27、大阪)、75頁〕

⑤月の出て罪を照り消す鵜川哉 芦玉

〔『俳諧鴨東新誌』86号(明治25・12、京都)、10ウ〕

⑥おのが世と船に飯くふ鵜飼哉 松江

〔三森松江『冥々集』(明倫社、明治30・8・19、東京)、35頁〕

⑦鵜遣や罪な事とは知りながら 晴山

〔『俳諧一日集』40編(明治25・7、東京)、47頁〕

⑧鵜つかひも心は鬼てなかり鬼 北銭

窓の灯、雪を溶かさず

〔『明治新撰俳諧一万集』博文館、明治24・11・17、東京、148頁〕

⑨鵜匠さへ袖に涙の燈籠かな 兎月

〔『俳諧鴨東新誌』96号(明治26・10、京都)、8オ〕

これらの俳誌等において、「鵜飼」は鵜に魚を吐き出させ、そして殺生を生業とする「罪」深いものとされる傾向にあった。④はその典型で、鵜の首に結わえた「鵜縄」をたぐる鵜飼は「罪(を)たぐりこむ」ようなもの、と詠んだのである。また、鵜漁は闇夜に行うのが通例で、月の明るい夜は鵜舟を出さないため、真如の月が「鵜川」を照らせは「鵜飼」の「罪を照り消す」こととなるのであった(⑤)。そして、「おのが世」とのみ考える「鵜飼」は、鵜に魚を吐き出させつつ自身が「船で飯くふ」ことに痛痒を感じない稼業か

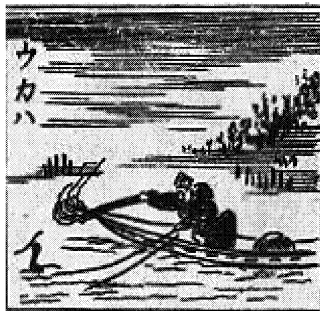


図1 鵜飼

もしれぬが(⑥)、「罪な事とは知りながら」生業に就いているやもしれず(⑦)、その「心は鬼で」はないといえる(⑧)。そのためか、「鵜匠」も盆の「燈籠」を見れば涙を禁じえないのであった(⑨)。

この「鵜飼・鵜遣」像は

明治期に出現したわけではなく、江戸期より謡曲「鶉飼」や芭蕉句ですでに流布していた。特に芭蕉句は、明治期の類題集にも多々採録された著名句である。

おもしろふてやかて悲しき鶉舟哉 翁

鶉のつらへ篝かゝるぞ哀なる 荷兮

首立て鶉の逆のぼる早瀬かな 浪化

かゝり火に見れば知りたる鶉匠かな 落梧

憎ていな顔も見へけり鶉のかゝり 桃居

〔発句古人五百題〕〔聚栄堂、明治31・6・12、東京〕、68頁69頁）

芭蕉句は謡曲「鶉飼」を踏まえた趣向で、すなわち「底にも見ゆる篝火に、驚く魚を追ひまはし、かづき上げ、すくひ上げ、隙なく魚を食ふ時は、罪も報も後の世も、忘れはて、おもしろや。（略）不思議やな篝火の、燃えても影の暗くなるは、思ひ出でたり、月になりぬる悲しさよ」^⑤における「悲しさ」は、月夜となったため漁が終わることを意味したが、芭蕉はそれに「歎楽極まりて哀情多し」（秋風辞）を重ねたのである。^⑥

明治期の「類句」(④)～(⑨)は、このような芭蕉句の趣向に着目したというより、謡曲「鶉飼」の世界や詞章自体をなぞった句作といえる。また、「発句古人五百題」は芭蕉句以外にも古句を挙げるが、宗匠達の俳誌等に荷兮・浪化句等に趣向を借りた句は稀少であ

り、あるいは次のような句も少数であった。

⑩ 一つ消え二つ消え鳧鶉の篝 米甫

〔俳諧明倫雑誌〕175号〔明治30・7、東京〕、12頁）

⑪ 鶉遣や顔に篝の色めきて 紫通

〔柳桜吟集〕1編〔明治31・7、福岡〕、9頁）

明け方近くか、川のあちこちで燃え盛る「鶉の篝」も「一つ消え二つ消え」、漁は終わりを迎えようとしており(⑩)、あるいは篝火が「鶉遣」の顔に照り映え、それが「色めきて」感じられるのである(⑪)。⑪は江戸期の落梧、桃居句に近く(前掲『発句古人五百題』)、また⑩は『新俳句』に収録されても違和感がないといえるが、宗匠達の俳誌等にこのような句は例外的で、多くは④)～⑨)と同趣向であった。

ここで、「類句」(④)～(⑨)と『新俳句』所収句(①)～(③)を比較してみよう。まず、子規達には「鶉飼」罪」という感覚がない。また、彼らは描写が具体的で、「鶉縄」の「雫」(①)、鶉の「羽た、き」(②)、「鶉籠」(③)等は宗匠達の俳誌等にほぼ見当たらない把握である。すなわち、同時代作品の多くが芭蕉句や謡曲「鶉飼」等の「鶉飼」罪・悲しき」という世界観に沿っていたのに対し、『新俳句』所収句はその世界にあえて触れず、「鶉飼」の具体的かつ微細な描写に撤した点に新鮮さが存在したのではないか。^⑧

子規達の①―③をさらに検討すると、碧梧桐句(②)は江戸期俳句や同時代俳誌等に類例が見当たらず、特に斬新な句であった可能性が高い。また、月我句(①)と子規句(③)は「類句」と相似てありながら、そこから外れる新しみが存在したと推定される。

①の月我句について、たとえば『俳諧発句自在』(聚楽堂、明治27・2・10、東京)「鶉」項を見てみよう。

(一) やがて身に 憎ていな 篝火に 首立て、
(二) 顔も見へけり 白髪も見へつ 見れば知りたる かゝる

鶉繩の

(三) 鶉の篝 雫かな 鶉匠哉 哀れなり (98頁)

季語ごとに五・七・五の各部分の措辞を列挙し、それらを組み合わせ一々に仕立てることを例示した俳書である。これらの文言を組み合わせると①の類似句が作成可能であり、次に掲げてみよう。

⑫ 篝火にかゝる 鶉繩の雫かな (『俳諧発句自在』)

① 篝火の 鶉繩に光る雫かな 月 我

⑫の内容は意味をなさないが、「篝火・鶉繩・雫かな」の語順は①と同様である。『俳諧発句自在』の例示した各措辞を「類句」の一基準とすれば、①の新鮮さは鶉繩の雫に注目した点ではなく、篝火に照らされた雫の光を発見し、かつ「篝火の鶉繩に光る雫かな」と詠んだ点にあるといえよう。

窓の灯、雪を溶かさず

また、③の子規句は江戸期に「類句」が存在する。季語ごとに例句を列挙した『俳諧自在』(晋永機編、博文館、明治32・8・7、東京)を見てみよう。

有明や繩にからまる鶉の勞れ 大梅 (486頁)

③ 暁や鶉籠に眠る鶉のつかれ 子規

夜中から魚を捕らえる鶉は有明頃に「勞れ」、鶉繩に「からまる」という句である(大梅は江戸後期俳人)。子規はこの大梅句を踏まえ、「有明」頃まで働かされた鶉も、「暁」には漁から解放されて「鶉籠」に入り、「つかれ」で眠っていると詠んだのではないか。^⑨

大梅句を踏まえて子規句を解釈すると、句の眼目は「有明」から「暁」に時を進め、そして「繩にからまる」鶉ではなく「鶉籠」に眠る鶉を詠んだ点にあったと推定される。同時に、同時代その他俳誌等の「鶉」句と比較した時、作者の意図とは別に「鶉籠に眠る鶉の勞れ」という趣向、また措辞自体に新鮮さが存在したといえよう。

このように、『新俳句』所収句と宗匠達の俳誌等の句群を比較した時、『新俳句』は各句の新しみの位相が異なるとしても、宗匠達の俳誌等と異質の世界・趣向を有する点で共通するのである。

これは偶然なのであろうか。このことを、「元日」(新年の季題)句で再検討してみよう。

Ⅲ. 元日の心／新聞

「元日」は一年の初めで、清新な気にあふれた一日であり、宗匠達の俳誌等で多数を占めるのはそのような「元日」句である。

①元日や昨日に変わる 起き心 一山

〔明治新撰俳諧一万集（前掲、東京、152頁）〕

②元日やひろくとせし朝心 梧堂

〔俳諧明倫雑誌〕157号（明治28・10、東京、10頁）

③元日やゆきよりしろき人ころ 一夢

〔俳諧新誌〕4号（明治25・2、金沢、5頁）

④元日や誠のそらとなるころ 機外

〔俳諧芭蕉露〕1号（明治26・1、山口、21頁）

⑤元日の心を大和心かな 琴喃

〔筑紫俳諧清風草紙〕29号（明治33・2、福岡、18頁）

⑥元日や老の言葉も新しき（無署名）

〔風雅乃菜〕8回（明治26・3、大阪、221頁）

年初初の朝は昨年大みそかまでの起き方ではなく、気持ちも新たに早起きするものである（①）。清々しさとともに家を見渡せば、前日までの大掃除で塵一つなく、調度も整い、部屋には初日が射しこみ、まさに「ひろくと」した気分であった（②）。人々の「こ

ろ」はいまだ何物にも汚れず、いわば「ゆきよりしろき」色のようであり（③）、それは晴れあがった初空のように無心に爽やかである（④）。この「元日の心」こそ本居宣長が「敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花」と謳った「大和心」に通じ（⑤）、あるいは年老いた者の口上も「新しき」ものとするのであった（⑥）。そして、「元日」は一年の平安を想わせる穏やかな一日としても詠まれた。

⑦元日や雪も静かに雲井より ひろし

〔俳諧鴨東新誌〕148号（明治31・2、京都、9才）

⑧元日や浪たひらかな四方の海 圃柳

〔俳諧明倫雑誌〕150号（明治27・1、東京、11頁）

⑨元日やみねをさだむるひがし山 蒼虬

〔発句作法案内〕〔積善館、明治29・10・1、大阪、81頁）

「元日」は雪すら「静かに」舞い落ち（⑦）、日本の「四方の海」の「浪」はあくまで「たひらか」であり（⑧）、初日は京都東山の「みねを」定めて年の始めを告げるのである（⑨）。

一方、「元日」は年始の挨拶などで多忙な日でもあった。

⑩元日や出るいとまなく人の来 きらく

〔俳諧明倫雑誌〕151号、明治27・3、東京、12頁）

⑪元日や鸚鵡返しの例言葉（無署名）

〔俳諧十万集〕春部〔前掲、大阪〕、6頁〕

初詣や挨拶などに向きたいが、「いとま」もないほど来訪者が多い(⑩)。交わす挨拶といえは、型通りの「例言葉」を「鸚鵡返し」に交わしあうのである(⑪)。

この他にも、「元日」における人々のありようは多様である。

⑫元日のこゝろ古郷へ通ひけり よしを

〔俳諧矯風雑誌〕7号〔明治23・1、東京、21頁〕

⑬やつと来た元日眠し気のゆるみ 里 旭

〔俳諧豊川集〕1編〔明治23・10、新潟〕、1頁〕

⑭元日も餌にいそがしき鷹匠哉 芳 泉

〔俳諧友雅新報〕65号〔明治15・6、東京、6ウ〕

せわしない日々を過ごして「元日」を迎え、一息つけば離れて久しい「古郷」を想い(⑫)、あるいは慌ただしい大晦日までは気が張りつめていたが、「やつと来た元日」は気の緩みで眠気がさす(⑬)。そして⑭は、初夢の縁起物に「一富士二鷹三茄子」と挙げられたため、「鷹匠」は「元日も」鷹の世話に忙しいはず…と興じたのである。

では、これら宗匠達の俳誌等の「元日」に対し、『新俳句』ではどのように詠まれたのか。

⑮元日や寺にはいれば物淋し 碧梧桐

窓の灯、雪を溶かさず

⑯元日やなげしに古き桑の弧 古 学

⑰元日の日の旗見ゆる小村かな 愚 哉

⑱元日の新聞多き机かな 把 栗

〔新年之部「元日」項〕

「元日」にあえて神社でなく「寺にはいれば」閑散としており(⑮)、あるいはその昔に「桑弓蓬矢」(男子誕生の折、厄除けのため桑の弓で四方に蓬の矢を放ち、世に立つ男となることを祈願した。中国の故事)で使用した「桑の弧」が、長押に他の雑多な物とともに古びたまま入っていた(⑯)。⑰は文明開化に遠いと思われた鄙びた小村が国旗を掲揚した風景に、また⑱は「机」に置かれた、平日と異なる「新聞多き」情景に、それぞれ「元日」の情調を見出している。

「元日」に寺へ赴く碧梧桐句、長押に「桑の弧」のある古学句、新時代の「日の旗」「新聞」に「元日」を感じる愚哉、把栗句……『新俳句』の情趣は、「昨日に変わる起き心」(①)や「出るいとまなく人の来」(⑩)に元旦の風情を感じた宗匠達の俳誌等と全く異なることが知られよう。子規達は、「人こゝろ」(③)や「鸚鵡返し」の例言葉(⑪)のありようではなく、他の同時代作品が目に残めなかつた具体的な場所や景物にあえて「元日」の風情を見出したといつてよい。

このように宗匠達の俳誌等と『新俳句』を比較した時、前節の「鶴」句同様に「元日」句にも双方に差異が存在し、加えて『新俳句』には同時代の俳誌等の掲載句——「類句」と称すべき句群——

と似た趣向が見当たらない結果となった。これは、偶然であろうか。

ここで、子規が「新俳句／月並句」の区別を述べた文を改めて読んでみよう。「我は意匠の陳腐なるを嫌へども、(略)彼は陳腐を好み、新奇を嫌ふ傾向あり」(前掲「俳句問答」)。「意匠の陳腐なるを」避けたのが「新俳句」とすると、子規達が「類句」と異なる趣向や措辞を使用したのはむしろ意図するところではないのか。

実際、『新俳句』にはこの推測を裏付けるような句群が存在する。その一例に福田把栗(⑱の作者)の句を検討してみよう。

IV. 雪の竹に朝日／窓の灯

①雪竹を壓する窓の灯かな 把栗

(冬下之部、「雪」項)

雪が降りつもる竹はその重みでしなっている。日が射せば雪は溶け、竹は元の姿に戻るが、日没後のため雪は「竹を圧する」ばかりであった。折しも窓から洩れる灯りが竹を照らす、それは雪を溶かすほどの光ではなかったという句意である。

ところで、宗匠達の俳誌等において「雪・竹」はどのように詠ま

れたのか。まずは雪の重みで竹がしなる句を見てみよう。

②ある丈の力見せけり雪の竹 節水

(「俳諧明倫雑誌」15号〔明治27・5、東京〕、18頁)

③堪忍の姿や雪に撓む竹 ときわ

(「明治新撰俳諧一万集」〔前掲、東京〕、76頁)

④堪忍の姿見せたり雪の竹 卯花

(「鴨川集」4号〔明治27・12、山口〕、23頁)

⑤堪忍の是れにもあるや雪の竹 梅年

(「俳諧芭蕉の露」1号〔明治26・1、山口〕、18頁)

⑥堪忍を人に見せけり雪の竹 三五十

(「越路の雪」4号〔明治30・10、新潟〕、14頁)

⑦養子する子に教けり雪の竹 (無署名)

(「俳諧十万集」冬部〔積善館、明治30・12・28、大阪〕、181頁)

当時、「雪・竹」句は人に「堪忍の姿」を示すと詠まれる傾向があった。すなわち、「雪の竹」は「ある丈の力」(②)を尽くして雪の重みに耐え、それは観る者に「堪忍の姿」(③)を彷彿とさせる(③)～(⑥)。そのため「養子」に赴く子供にその姿を見せ、「堪忍」のありようを論ずるのであった(⑦)。

そして、「堪忍」は永遠に続くのではなく、「旭・日」が射すと「雪」は溶け、重みが消えさると詠まれている。

⑧折れぬのも日の恵み也雪の竹 堅久

〔俳諧明倫雜誌〕52号〔明治18・3、東京、11頁〕

⑨雪に寝た竹を旭の起こしけり 蓮 齊

〔風雅の葉〕8回〔明治26・3、大阪、4頁〕

⑩日の恩や雪を払ふて起る竹 谷 水

〔筑紫清風草紙〕27号〔明治32・9、福岡、27頁〕

朝を迎えると「雪」は「旭・日」の光で溶け、「雪に寝た竹」

（⑨）は「起る」（⑩）のであり、それを「日の恵み・日の恩」（⑧

⑩）「旭の起こしけり」（⑨）と措辞を凝らした点が句の工夫であるが、いずれも同趣向といえよう。

このように、当時の「雪・竹」句は②―⑩のような趣向が多数を占め、「類句」として定着していたといえる。では、これらの「類句」と①の把栗句を比較した時、どの点が異なるのであろうか。

把栗句において、竹は雪に圧せられるのみである。作者は雪にたわむ竹を「ある丈の力見せけり」（②）と思いやることもなく、また「堪忍の姿」（③）も見出さず、「雪（が）竹を壓する」と事実のみ言い放し、それ以上の感慨を何も語らない。まず、この点が当時の他の「雪・竹」句と異質である。

また、把栗句は「窓の灯」が竹を照らす点が特徴的といえよう。通常、竹を照らすのは「日・旭」の光であり、竹は「日の恵み」

窓の灯、雪を溶かさず

（⑧）で「雪を払ふて起る」（⑩）ものである。しかし、把栗句の「窓の灯」は人工の微弱な光であり、闇夜の「竹」にのしかかる「雪」を溶かすことなく、その姿を浮かび上がらせるのみであった。このような景色は、同時代の「類句」（②―⑩）からすると奇妙ではないか。「類句」において、「灯||光」は「竹」から「雪（||堪忍）」の重みを取り払い、「雪竹を壓する」状況に救済をもたらすが定番であったが、把栗句の「窓の灯」はその状況を何ら解決せず、ただ「雪竹」を照らすのである。

この「窓の灯」の特徴に、おそらく作者は自覚的であった。それは「窓の灯かな」と切字が添えられ、作者の感興が「窓の灯」に注がれていることが示されているためである。では、なぜ作者は「窓の灯」に注目したのか。

先述のように、「類句」であれば日光が雪を溶かし、竹は元通りに「起る」（⑩）はずが、「窓の灯」は「雪竹を圧する」景色を浮かび上がらせるのみである。すなわち、「窓の灯」句は「類句」と似ていながら、それを裏切るような趣向であり、作者はその点に新鮮さを見出したために「窓の灯かな」と詠んだのではないか。「雪竹を壓する」景色を照らすのみの「窓の灯」など、「類句」的には意味のない光であろう。しかし、作者の把栗はその無意味さにこそユーモアを感じたのである。

把栗自身にこのような発言が存在するわけではない。しかし、「雪の竹」に「窓の灯」が照らされた風景——現在では平凡に感じられるような——をあえて詠んだのは、「雪・竹・灯」と「類句」同様の取り合せでありながら、その裏をかくような趣向に新鮮さを感じたためと推定されるのである。そして、子規も把栗句にこのような魅力を感じたからこそ『新俳句』に収録した、とは深読みに過ぎるであろうか。

おわりに

俳諧宗匠の俳誌等と『新俳句』双方の句群を比較したが、取り上げた句群は一例に過ぎず、また課題も存在する。

たとえば俳諧宗匠達の俳誌・俳書類は膨大であり、まずそれらの踏査が必要であろう。また、「類句Ⅱ月並句」の同趣向・措辞等については類題句集（季題ごと）に江戸期以来の例句を示し、句作の模範を示したものの、Ⅱの『発句古人五百題』等の存在も見逃せない。明治期の「類句」を検討する際、類題句集が「類句」形成に影響を与えたと推定されるため、それと俳誌掲載の句との関連性を検証する必要がある^⑩。

同時に『新俳句』に関し、「新奇」の位相を全体に渡り調査せねばなるまい。そして、各作者の意図と選者子規の鑑賞眼とをそれぞれ

れ検討する必要もあろう。

では、『新俳句』所収の二、三句をいくつかの同時代俳誌と比較することの意義は何か。それは、子規達は論者であるとともに実作者であった点を具体的に指摘しうるためである。

新奇と言ひ、陳腐と言ふ、比較上のことなり。且つ新奇と感
じ、陳腐と感ずる程度は各人相異なるを免れず。

（明治二十九年の俳諧、「日本新聞」明治30・1・25）

従来、「俳句革新」はこのような子規俳論を参照して確認されてきた。すなわち、革新の御旗を掲げた子規達は「旧派」の「陳腐」な句群を批判し、新時代にふさわしい「新奇」な句を求めたのである。それは「明治二十九年の俳諧」に明瞭であるという。子規が「陳腐」を否定し、「新奇」を希求する論を発表したのは事実である。同時に、彼らはその主張を句作で実践した実作者ではなかったろうか。

子規達がどのような「比較」の上で「陳腐／新奇」を判断し、作品で実践したかは、彼らの句を実際に検討せねばなるまい。そして、子規達が「陳腐」ではない「新奇」な作品を詠んだとすれば、「月並者流」（と子規達が呼んだ）の「類句」を踏まえた上で、子規達のどの点が「新奇」であったかを考察する必要があるであろう。

論者にして実作者であった子規達は、論では「月並者流」を批判

し、作品では「新奇」な句群を発表することで「俳句革新」を試みたはずである。『新俳句』所収句は一例であるが、それは子規達の句作者としての「俳句革新」の姿を、今に伝えてはいないであろうか。

注

- ① 「旧派」は子規達が使用し始めたのではなく、岡野知十「俳諧風聞記」(『毎日新聞』明治28・9・18)同年10・1)が「新派/旧派」と区分して以来、俳壇に流行し、次第に高まる周囲の声の中で子規達も使用したと推定される。
- ② 「陳腐」月並者流/新奇「俳句革新」の整理は、個々の先行研究というより研究全体でなされたものであり、示唆的な指摘である。
- ③ 「新俳句」は上野三川・直野碧玲編集であるが、子規が選句・校閲に深く関係したことが知られ(『子規全集』16巻〔本文前掲〕所収「新俳句」解題等参照)、子規選に近い状態だったことがうかがえる。よって、本稿は「新俳句」をほぼ子規選の選集とした。
- ④ 「月並者流」(と子規達が称した派)と子規達の句群を比較分析した研究は、従来必ずしも盛んとはいえない。今後の研究に待ちたい。
- ⑤ 謡曲「鶴飼」本文は、「鶴飼」(僧小川日貞、明治27・5、9)10頁)に拠った。なお、適宜漢字等に直した。
- ⑥ 芭蕉句の解釈は『新日本古典文学大系70 芭蕉七部集』(岩波書店、平成2・3・20)所収「あら野」(上野洋三校注)に拠った。
- ⑦ 「新俳句」「鶴」項の全句が「鶴飼」罪」を考慮しない作品、というわけではない。たとえば、「鶴飼名を勅作と申しあはれ也」(夏目漱石句)

窓の灯、雪を溶かさず

は本文引用の荷兮句と似た趣向を取りつつ、「鶴飼」罪深い生業」という観念に沿った句と推定される。

- ⑧ 従来の「類句」の世界観を踏まえ、あえてそれに触れずに微細な描写にこだわる姿勢が俳句の「写生」の要点であったと推定される。このような「写生」の位相を指摘した先行研究に渡部直己「リアリズム批判序説——正岡子規における「明視」の誕生と溶解」(『早稲田文学』117号、昭和61・2)等があり、示唆的である。

⑨ 子規の「鶴」句は、柴田奈美「正岡子規と俳句分類」(思文閣出版、平成13・12・20)が「鶴もつかれ鶴飼も眠る夜明哉」(水花句、「花摘」(元禄3)所収)との類似を指摘している(190頁)。子規は水花・大梅句双方を組み合わせて詠んだと推定されるが、彼自身どの程度意識的に行ったかは実際に判然としない。いわば無意識に古句を借りた可能性があるが、本稿は水花・大梅等の先行句を踏まえた句作と見なした。

⑩ 類題句集は江戸期より膨大な点数が刊行され、それらは句作入門書の側面を有したため「月並句」形成に規範を与えたと推定される。また、江戸後期から明治初期にかけ、芭蕉等の故人句と同時に現存俳人句を多数収録した類題句集が頻繁に刊行された。よって、明治期の「類句」に影響を与えたのは芭蕉等の元禄期の有名句より、その時期ごとの著名俳人の作品であった可能性も高い。たとえば、本文Ⅱ節の「鶴」句で「月並者流」の俳誌等と『発句古人五百題』所収句を比較したが、俳誌等の句に影響を与えているのは芭蕉句のみで、他の荷兮・浪花句等の影響はほぼ見当たらない。さらにいえば、当時の俳誌等における「鶴」句は芭蕉句より他句の影響が強く感じられ、ここに江戸後期、明治初期の現存俳人達の類題句集の存在が考えられる。しかし、類題句集には不明な点が多々存在するため、今後の調査に待ちたい。

窓の灯、雪を溶かさず

(図版出典)

図1 『新撰季奇掌中俳諧教草』(松田文書堂、明治15・11)「六月」項

※引用に際し、漢字は常用漢字に直し、ルビ及び圈点は省略し、清濁及び句読点を補うなど、読みやすさを考慮して適宜変更した。